

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp

濃い系Psionの世界 (其の2)

4輪ミニカーのこと

筆者は変な車にこだわるほうだと思っている。そりゃ、世の中には強烈かつ濃厚なカーマニアが沢山おりそうだった方々にはかなわないものの、まあ、通常一般のカーマニアよりはかなり「変」なほうだと自覚している。

もともと筆者はでかい車が嫌いだ。小型の携帯端末マニアということもあり、とにかく小さいものを好む筆者は、ホンダが1991年に発売したミッドシップの軽自動車「BEAT」と、1971年製造のフィアット500「チンケチンケ」に乗っている。それほど遠出することもなし、近所の買い物がメインの使い方であれば、これで十分なのだ。そんな折、やはり車マニアの友人で、人と違ったモノを好む「狂人単駆(クルト・タンク)」氏が、実に妙な「自動車」を購入した。筆者も乗せてもらったのだが、これが大変面白い製品で、物欲モード全開でグッときてしまっている……。

小型自動車の車種には「ミニカー」と呼ばれる分類がある。これは、原動機付自転車、いわゆる原付の車種のひとつに分類されているが、原付とは異なり自動車として扱われるため、普通自動車免許が必要である。しかし、そのおかげで、原付が受けるさまざまな制約が無いという車なのである。

今回、クルト・タンク氏が購入したものは、ATV50と呼ばれる4輪のミニカーで、「総排気量(または定格出力)が20cc(250W)を超え50cc(600W)以下の原動機を有する車で、輪距が500mmを超える3輪以上の車」という分類に属するものだ。その格好はといえば、まるで月面クルーザーのごとく近未来的なデザインであり、渾で良く走っているバギーカーそのものである。このような突拍

子もない格好の車が公道を合法的に走ることができるというのも驚きであるが、なによりもこの車、価格がめっぽう安い。リアにディスクブレーキを搭載しリバースギアも装備したモデルでも30万円を少し超える金額で購入できてしまうのである。しかも、維持費はといえば、原動機付き自転車の「ミニカー」が適用されるので、年間税額はたかだか2,500円だし、自賠責保険も2年間で10,630円しかかからない。また、原付ではないので、ヘルメットの着用も原則 unnecessary のだ。もっとも、こういった車に乗る場合には、常識的な意味でヘルメットの着用は必須であることは言うまでもないが(写真A~D)。

さっそく実車に乗せてもらったが、4輪のバイクといった表現が適切であろう。カーブの際にちょっとコツが要ると、ハンドルが重いことを除けば、走行はオートマチックなので楽チンだし、全身に風を浴びて走るのは爽快そのものだ(冬はちょっと辛いけどね……)。50ccでパワーも限られているため、現代の車の流れに追従するのは少々きついものがあることは事実だが、究極の変テコ車趣味としてはこれ以上のものは無いであろう。しかも近日中に、まるで自動車のようにシートと丸ハンドルとペダルが付いた、カートタイプのももラインナップされるとのことで、筆者はこのカートタイプに大期待しているところである。

なお、この4輪ミニカーにご興味のある方は、下記URLを参照して見ていただきたい。値段が安いので気が付いたら買っていた……、なんてことのないよう、くれぐれも注意していただきたい!



ATV-50

<http://www.atv50.com/> (輸入元)<http://www.hokuyou-auto.com/ringyou/> (販売店)

ATV-50

Kawasaki Motors Corp., U.S.A.,

4輪ミニカー「ATV-50」の外観

これが普通免許で乗れる自動車（ミニカー）、ATV-50。こんな車が公道を走れるということに驚きを感じてしまう！



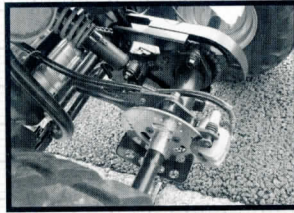
BFONT

プロジェクタータイプの2灯式ヘッドライトを持つ正面。その面構えはあたかもガ○ダムが攻殻○動隊か？といった雰囲気！



CGEAR

ナンバーは原付スクーターと同じく、市区町村役場に登録を行う。ただし、ナンバーの色は水色



D後輪に設けられたディスクブレーキ

オプションでディスクブレーキまで搭載されるATV-50。これを見る限り、ブレーキはFIAT500より立派だ!!

産業用Psionの世界

本題に入ろう。

良く知られているように、Psionは個人向けPDAの他にも、産業用端末を製造・販売していた。その代表が「Psion Workabout」である。Psion Workaboutは1995年に発売された業務用端末であり、縦長の特徴的な筐体は簡易防水機能を備えた堅牢なものだった。Psionと言えばSeries3に代表される、オシャレで華奢なデザインのPDAを思い浮かべてしまうが、同じ会社がこのようなマッチョな端末を製造していたというのは、興味深い (001)。

Psion Workaboutは、外見はSeries3とまったく異なった

ものとなっているものの、搭載OSはEPOCであり、若干の修正を施すだけで、Series3用の各種アプリケーションソフトをそのまま動作させることが可能であった。たとえば、本誌ではすっかりお馴染みとなった、柴屋上人 稀瑠冥固守 (Kerberos) 氏制作のPsion Series3用日本語エディタ「JEdit」も、若干の修正を施すことで「JEditw」としてWorkabout上で動作する。

さて、Psion Workaboutは日本でも総代理店が入り、主に法人向けとして発売されていたので、目にした方も多いと思われるのだが、PsionにはWorkaboutの前バージョンとも呼べる産業用途向け端末が存在した。それが、今回ご紹介する「Psion HC110」である (002)。

001

Psion Workaboutのカタログ

Psionが1995年に発売した業務用端末の代表作「Psion Workabout」のカタログ

002

Psion HC110の外観写真

HC110の外観写真。大きさ比較のため、前回ご紹介したPsion Sienaを並べてみた。プロポーションからキー配置までまったく性格が異なる端末であることがわかる

HC110というマシン

Psion HC110というマシンは、Psion初の産業用携帯端末として、1991年に発売された。もっとも、HC110以前にもPsion端末は産業用途に使用されていた。Psion Organizer-IIなどの初期PDAには、オプションでバーコードリーダーを装着することが可能であった。しかし、さすがに民生用PDAでデータ収集を行うことには、信頼性上の限界があったのであろう。そこで、HC110のようなヘビーな専用端末が発売されたのである。

HC110を持ってまず感じるのは、その圧倒的な重さと大きさだ。電池込みで532gという重量は、PDAと言うよりはサブノートパソコンに近いものがある。筐体は飾り気がまったく無いグレーのプラスチック製直方体で、いざという時にはこれで犯人を殴り倒すことができそうなくらい、頑丈にできている。筆者は、HC110を2台所有しているが、毎朝これを両手に持って腕の筋肉を鍛えるためのダンベル代わりに使用している、というのは冗談だ。

筐体が頑強なのは見かけだけではなく、スペックによると約3フィートの高さからコンクリート床面へ、どの方向を下にして落下させても大丈夫だということになっている。ホントかよお?と思ってしまうのであるが、このマシンを持ってみると、あながちウソにも思えない (003)。



Psion HC110のインターフェースモジュール

2台のHC110それぞれに搭載されていたインターフェースモジュール。1台はケース上部に、もう1台はケース下部に搭載されていた。どちらのモジュールも抜き差し自在だ

搭載するCPUは、NECのV30Hだ。この80C86コンパチブルのCPUを、3.84MHzで駆動していた。ちなみに、Workaboutは同じV30Hを7.68MHzという倍速で駆動する。

HC110はQWERTYキーボードを搭載しておらず、Workaboutと同様、アルファベットをそのまま並べたものとなっている。QWERTY配列に慣れた人にとっては、入力是非常に「しんどい」。特に、後述するようにHC110はMS-DOSと同様、コマンドラインによるオペレーションが採られているので、なおさらである。キーそのものはクリック感は無いの、押した時にクリック音が電子的に出るため、入力ミスは少ない (004)。

キーは横6個×縦9個に整然と配置され、左下のENTERキーのみ2個分の大きさになっている。上部にアルファベットが、下部にテンキー部が来る構造は、Workaboutと逆の配置だ。Workaboutでは、キーの配置もデザインされており、単純なマトリクス配列ではないのであるが、HC110は、それこそ真面目に配置されており、たいへん素っ気無い。あたかも、大企業の法務部に勤務する人と打ち合わせを行っているような感じになってくる。

データ収集用端末として作られたHC110は、I/Oポートが特徴的となっている。I/OポートはHC110本体の上下に設けられており、上側がPort A、下側がPort Bと称されている。どのI/Oポートにどのインターフェースモジュールを搭載するかは、基本的にユーザが設定することが可能で、筆者が所有している2台のHC110は、それぞ



Psion HC110正面と裏面

質実剛健という表現がピッタリのHC110の表面。製品の銘版シールが添付された裏面。何の色気も無い...



Psion HC110キーボードのアップ

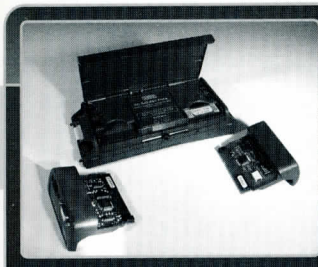
クリック感はないが、電子的なクリック音が出る仕組みになっている。QWERTY配列ではないので、文字入力はしんどい!



本体とクレイドルとを接続する高速通信ポート

8個並んだ金色の接点クレイドルとの高速通信に使われる。その右側には外付けACアダプタの入力端子がある

006



インターフェースモジュールの搭載状況
このように本体からズボットと取り外すことが可能だ

れ異なったインターフェースモジュールを搭載していた(005)。

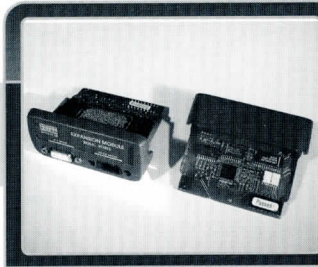
1台は、Port BにTTLシリアル (D-Sub 9Pin) とRS232Cシリアル (特殊コネクタ11Pin) の2つが搭載されているモジュールが組み込まれていた。また、もう1台には、Port Aにパラレル&プリンタポート (D-Sub 25Pin) とRS232Cシリアル (特殊コネクタ) が搭載されているモジュールが組み込まれていた (006)。

Port AとBに組み込まれているインターフェースモジュールを取り外す方法だが、まず本体裏側のカバーを開く。バッテリーを挟んで左右両側にSSD (Solid State Disk) のスロットがあるが、そこに「LOCK」と「UNLOCK」の記号が刻印されたレバーが見える。これがそれぞれPort AとBのロックレバーとなっている。ロックレバーを開放の状態にスライドし、モジュールをそのまま上方向に引き出せば、本体から取り外すことができる。なお、本体とI/Oポートモジュールとは、25ピンのヘッダピンで接続されている (007)。

一方、これらのI/Oポートとは別に本体右側面には、クレイドルに接続してデータを収集する際に使用する8ピンの高速通信ポートが設けられている。このポートはHC110クレイドル専用だ (008)。

HC110でのSSDの搭載方法であるが、上述したように本体裏面のカバーを開けると現れる2つのスロットに挿入する構造となっている。本体裏面カバーを開けると、中央に専用のNi-Cdバッテリーパックが搭載され、その

007



インターフェースモジュールのアップ
本体から取り外したインターフェースモジュール。本体とモジュールとは、筐体内部でヘッダピンを介して接続される

上下がSSDスロットとして用意されている。SSDメディアは、Psion Series3で使用するFLASH Packが普通に使えるのだが、容量1MB以上の製品はうまく認識ができないようだ。なお、スロットの上がAドライブ、下がBドライブとして認識される (009)。

HC110には、メインバッテリーとして専用のNi-Cdバッテリーパックを、バックアップバッテリーとしてCR1620リチウムボタン電池を使用する。メインバッテリーには単三乾電池などの汎用電池は使用できない。HC専用のNi-Cdパックは、1.2Vのモジュールを6個直列に接続したタイプで、7.2V/500mAhの定格となっている。1991年製造ということもあり、バッテリーそのものは粉を吹いて完全に死んでいるのだが、内部には急速充電のための制御回路と温度ヒューズが組み込まれているため、死んだ電池を交換をする際は注意を要する。バックアップ用のリチウムボタン電池は、本体下側にあるI/Oポート (Port B) のカバー内部に搭載されており、取り説が無いとフツウの人では、その存在すらもわからない、といった親切設計だ (010)。

ところで、Psion HCシリーズには、HC100、HC110、HC120という3種類が存在する。これら各モデルは、搭載するRAMメモリの容量やLCDのバックライトオプションの有無が異なっていた。各シリーズの搭載RAM容量については、別表に掲載したスペックを参照していただきたい。なお、ROM容量はシリーズ共通で256KBとなっている。HCシリーズに搭載されるROMは、Flash ROM

009



HC110に搭載されるSSD (Solid State Disk)
本体裏側のカバーを開けると、メインバッテリーの左右に2基のSSDスロットが搭載されている

010



メインとサブバッテリーの搭載状況
サブバッテリーのリチウムボタン電池は、本体下部のインターフェースモジュール取り付けスロット内部に搭載される。非常にわかりにくい場所にあるのだ!

であった。産業用途として設計されたこのマシンは、ROMベースでアプリケーションを組み込むことさえ可能であり、それぞれ電源ONですぐに特定アプリケーションを起動させることもできたのだ。なお、バックライトが搭載されるモデルは、HC110AL、HC120AL及びHC120NLとなっている。

HC110の液晶画面は160×80ドットの大きさを持つ。表示は極めて見やすく、バックライトもオプションで搭載しているので、暗いところでも視認性は高い。液晶の濃度調整は、本体上部にあるLCDボタンで行う。このボタンを押し続けると、淡→濃の方向へ28段階に渡り変化してゆく。液晶は半角英数字で横26文字×縦9行が表示可能だ。バックライトは、同じく本体上部にあるボタンを押すことで点灯する。HC110とWorkaboutのスペックを記載しておく。

SienaとSeries3cのスペック

モデル名称	Psion HC110	Psion Workabout
発売年	1991年	1995年
CPU	V30H (3.84MHz)	V30H (7.68MHz)
搭載RAM容量	HC100 128KB HC110 256KB HC120 512KB	1MB
搭載ROM容量	256KB Flash ROM	1MB Mask ROM
ディスプレイ	160×80dot 26文字×9行 バックライト (オプション)	240×100dot 39文字×12行 バックライト (オプション)
キーボード	英数字 53キー	英数字 57キー
I/Oポート	オプションとして提供 RS232Cポート×1 TTLシリアルポート×1 パラレルポート×1 etc.	オプションとして提供 RS232Cポート×1 TTLシリアルポート×1
通信ポート	クレイドル接続用8P端子搭載	データ集配接続ポート (LIF)
サウンド機能	ビエゾプザー	ビエゾプザー
メインバッテリー	Ni-Cdパック (7.2V/600mAh)	単三乾電池2本
サブバッテリー	CR1620	CR1620
メモリカード	SSD Drive×2	SSD Drive×2
サイズ	200 (W)×80 (D)×35 (H) mm	180 (W)×90 (D)×35 (H) mm
本体重量	532g (バッテリー込み)	325g (バッテリー込み)
OS	EPOC (ビジュアルシェル非搭載)	EPOC (ビジュアルシェル搭載)
動作条件	0℃～60℃ (動作時) -20℃～70℃ (保存時)	-20℃～60℃ (動作時) -25℃～80℃ (保存時)
防水機構	防塵、防霽	防塵、生活防水 (IP54)

HC110の動作

それでは、さっそくHC110を起動させてみることにしよう。一番最初に電源を入れた時とリセットボタンを押した時は、デスクトップPCと同じような情け無いビーブ音の後、以下のメッセージが出力される(011)。

```

@ Psion PLC 1991
Insert Pack
and press enter
    
```

ここでENTERキーを押しても何も起こらないので、慌てず騒がず「Psion」キー+「ESC」キーを同時に押す。なお、「Psion」キーとは、キーボード左下にある「LOCK」と兼用

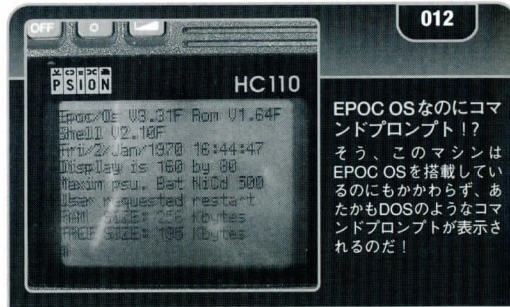
になっているキーである。ちなみに「Psion」キーに表示されている記号は、「Cup and saucer logo」と呼ばれている。

さて、最初の起動時に上記のような挙動を示すのは、HC110が自動起動ファイルである「autoexec.btf」という、DOSで言うところのバッチファイルを参照しに行くためだ。このファイルが存在していれば、指示に従いマシンを起動させるのだが、ファイルが無いと上記のように無限ループに入ってしまう。産業用として作られたHC110は、現場で使用するアプリケーションソフトの起動をこのバッチファイルに記述しておくことで、すばやく処理に移行できるように作られているのである。

起動時のループをキー操作で抜けると、下記メッセージを出力して、コマンドプロンプトが出現する！ (012)



011
HC110をリセットスタートした直後に表示される画面
SSD内に自動起動ファイルが存在しない場合、この画面が出力される



012
EPOC OSなのにコマンドプロンプト!?
そう、このマシンはEPOC OSを搭載しているにもかかわらず、あたかもDOSのようなコマンドプロンプトが表示されるのだ!

```
EpoC/0s V2.32F Rom V1.51F
Shell V2.08F
Fri/8/May/1970 07:14:25
Display is 160 by 80
Maxim psu. Bat NiCd 500
User requested restart
RAM SIZE : 256 KBytes
FREE SIZE : 190 KBytes
$
```

上記メッセージのうち、日付けやFreeのメモリサイズは、マシンの型や使用状況に応じて異なった表示となる。この画面では、HC110に搭載されているOSのバージョンや内蔵メモリ容量、ディスプレイの解像度等が出力される。最後に「\$」と表示されてコマンドプロンプトが出力されるが、これはコマンドシェルが立ち上がり、コマンド入力が可能になったことを示している。

ここで、Psionユーザなら「ん？」と思うはずだ。そう、Psion起動時には、上品なデザインを施されたビジュアルシェルが現れるはずである。なのにこのマシンは、EPOC OSを搭載しているにもかかわらず、コマンドプロンプトが表示されるのだ。HC110は、MS-DOSに似たコマンドドリヴンのインターフェースを搭載したマシンなのだ。もともとEPOC OSそのものは、ファイルシステムや命名規則がMS-DOSライクとなっているのだが、Series3以降のPsionではビジュアルシェルが被さっているおかげで、それをあまり意識せず使用することができた。HC110ではそれが無いので、MS-DOSのようにコマンドを打ち込んでやる必要がある。DOSマシンのようなPsionというのも、なんだか奇妙な感じである。

起動したところで、ドライブ構成を調査してみることにしよう。起動時には内蔵メモリ (RAM) であるMドライブがカレントとなっている。起動メッセージにはRAMサイズとして256KBと出ているが、実際にMドライブのDIRを取ってみると、192,768byte (約188KB) のフリーエリアしか無い。残りの67KBは、OSがワークとして使用しているようである。

SSDスロットは、上部がA、下部がBドライブとして認識される。ただし、使用できるSSDの容量は、512KBまでの製品だ。1MBのSSDは認識することができない。他のPsion製品との互換性は高く、Series3以降のマシンで使用したSSDは容量が512KB以下であればHC110で問題無く読み書きすることができる。

HC110で利用できるコマンドであるが、MS-DOSと「微妙に」異なっている。たとえば、カレントドライブをMからAに変更するためにはMS-DOSではただ単に「A:」と打ち込むだけで良かったが、HC110では「CD A:」と

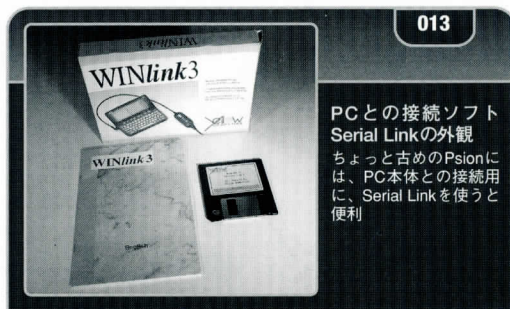
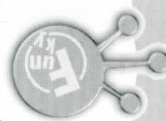
入力しなくてはならない。ディレクトリ表示コマンドには、すべて表示する「DIR」コマンドの他に、サマリー表示を行う「D」コマンドも用意されている。FORMATやCOPY等、DOSと同様に使用できるコマンドも多いので、一旦慣れてしまえばそれほど戸惑わなくて済む。なお、HC110で使用できるコマンド一覧については「SIBO 'C' Software Development Kit」の「HC PROGRAMMING GUIDE」の中、「CHAPTER 3 HC COMMAND SHELL」の章に詳細に記載されている、と書いたが、このSIBO SDKを持っている廃人って、そうはいないよなあ……。

PCとの接続方法

HC110にはI/Oポートモジュールを介してRS232Cインターフェースを搭載することが可能である。ここでは、シリアル/パラレル拡張モジュールを使用した、PCとの接続方法について述べてみよう。

HC用のシリアル/パラレル拡張モジュールは、D-Sub 25Pinの一般的なパラレルポートと、丸型コネクタのRS232Cシリアルポートが搭載されている。通常、シリアルポートといえば、D-Sub 9Pinを思い浮かべてしまうのだが、この拡張モジュールに付いているコネクタは丸型の特殊形状だ。一見して特殊なケーブルが必要かと思ってしまうのだが、実はそうではない。

PsionシリーズをPCに接続するためのコネクションキットとしては、前回のSienaの回でも紹介したPSIWin2を使うのが一般的である。しかし、Series3や3aといった、ちょっと古めのPsionの場合には、接続用ケーブルが同梱されたSerial Linkと呼ばれている接続キットを使用する。このSerial Linkに同梱されているシリアルケーブルは、ケーブルの途中にポッドが付いた特殊なものだ。このポッドであるが、Series3や3aにはPDA本体内部にリンクのために必要なファームが搭載されていないため、それを外付けのポッドが提供しているために必要となる (013)。



013

PCとの接続ソフト
Serial Linkの外観
ちょっと古めのPsionには、PC本体との接続用に、Serial Linkを使うと便利



014

HC110にSerial Linkケーブルを接続したところ

Serial Linkに付属するケーブルからポッド部分を取り去り、直接HC110のRS232Cコネクタ(丸型)に接続するだけ

さて、このシリアルケーブルとポッドとの接続コネクタであるが、形状がHC110のシリアルコネクタと同じ丸型のもので採用されている。HC110にはリンクのためのファームが本体に内蔵されているため、リンクの際ポッドが不要なのだ。そのため、ケーブルからポッドを外し、丸型コネクタをそのままHC110のシリアルコネクタに接続すれば、PCとリンクさせることができるのだ (014)。

PC側では、Psion用リンクソフトウェアとしてWINlink3を使用した。このソフトウェアは、1995年にYellow Computingが発売したもので、対応プラットフォームは

Windows 3.1となっているが、XPでもナントカ問題無く動作する。HC110側では、本体のROMに格納されている「link」コマンドを使用する (015)。

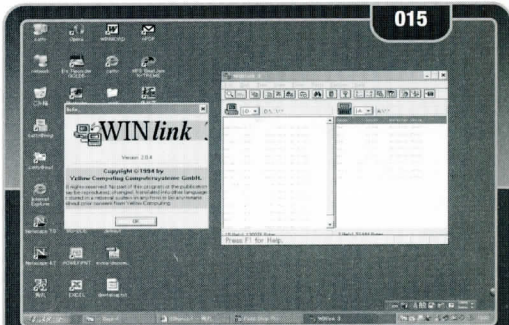
ポッドを外したSerial Linkのケーブルを用いて、HC110とPC本体とを接続した後、HC110のコマンドプロンプトで「link」と入力しPC側でWINlink3を起動させる。このとき、PC側で使用するCOMポートの設定と、ボーレートの設定 (9600bps) は、予め行っておく必要がある。設定が正しければ、HC110のLCD画面上に下記メッセージを出力し、PCとのリンクが確立する。それはもう、あっけないくらい簡単である (016)。

```
Run ROM: :LINK.IMG
Started LINK.$08
$
```

確立したリンクを解除するには、HC110のコマンドプロンプトで、「term link」と入力してやれば良い。一旦リンクが確立すればPC側のWINlink3の画面でファイルを自在に転送することができる。

HC110での日本語環境

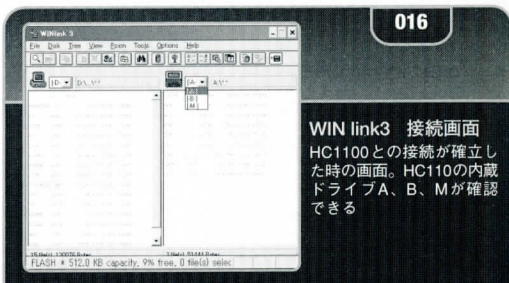
さて、ここまで書いてきて、次に来るのはお約束の日本語化であるが、HC110でも日本語のメモが取れる。作者は、もう説明する必要もない廃人、柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏だ。だいたい氏は腕時計 (Ruputer) 上



015

Yellow ComputingのWIN link3起動画面

Windows XP上で動作するWIN link3。ソフトウェアのバージョンは2.0.4である



016

WIN link3 接続画面

HC110との接続が確立した時の画面。HC110の内蔵ドライブA、B、Mが確認できる

にも日本語エディタを搭載してしまうほどの変人なので、HC110用日本語エディタを開発したところで、格別驚くに当たらないのかもしれない。しかし、日本に何台も無い、しかも産業用途のビンテージモデル上で動作する日本語エディタを開発してしまうというのも、なんだかなあ…… ^ ^ ; (017)

とはいえ、HC110はPsion Series3以降と同様にEPOC OSを搭載したマシンなので、Series3向けに公開されているJEditの移植は可能である。プログラム開発で大変だった点は、HC110では予め用意されているライブラリがSeries3と比較して少ないので、たとえばウィンドウを生成するといった基本的な動作でも、その部分のプログラムを最初からコーディングしなければならず、手間がかかることだ。柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏に、その一例を示してもらった。

P143に示したサンプルリストは、HC110のLCD画面に最大サイズのウィンドウを開き、その中にテキストを表示するという簡単なプログラムのソースコードである。プログラムリストの下部に「main(VOID)」という関数があるが、これがメインルーチン。メインの中で「Create Window()」という関数を呼んでいるが、この関数はSeries3等ではライブラリとして用意されており、ただ単にこの1行を記述するだけで良い。しかし、HC110ではそのようなライブラリが用意されていないため、リスト上部に

ある「CreateWindow(VOID)」という関数をわざわざ作成してやらなくてはならない。この記述だけでも、20行近くになってしまう。このように、HC110ではSeries3と比較して、プログラム開発に多くの手間がかかってしまうのだ(018, 019)。

さて、HCEditのインストールであるが、ここではAドライブに挿入したSSDに格納する場合を記載する。ディレクトリとファイルの構成は下記の通り。

・ dic ディレクトリ	
jisyo.dic	334,034bytes 辞書ファイル
jisyo.idx	420bytes 辞書インデックスファイル
・ fon ディレクトリ	
elisam10.fnt	55,016bytes フォントファイル
・ txt ディレクトリ	
作成した文書を保存するためのもので、最初はフォルダのみ作成しておく	
・ img ディレクトリ	
hcedit.img	15,760bytes HCEditプログラム本体

上記のように必要ファイルをインストールしたら、後はコマンドプロンプトから「HCEdit」と打ち込めばよい。すると文書編集画面が表示され、入力待ち状態となる。「MENU」キーを押すと、ファイルのロードやセーブ、バージョン情報等が表示される。ちなみに現在のバージョンは、Ver1.1 (2002/09/16) 版となっている。

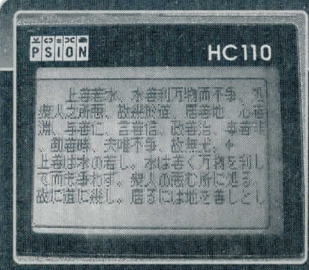
HC110の画面では、横17文字×縦7行が編集用エリアとして表示される。最下行は入力ラインとなっており、文字入力から変換候補表示、確定までに使用される。使い勝手は基本的に他のPsion Series3用日本語エディタ「JEdit」と同等である。

HCEditのプログラムは、例によって下記の筆者サーバの中に入れておいたので、使ってみたい人はダウンロードしていただきたい(しかし、HC110を所有しており、

なおかつHC110で日本語メモを取りたいという方が、一体何名いるのかは不明であるが……)。

関連HP Psion用ソフトウェアのページ
http://www.funkygoods.com/nazopa/psion_s.htm

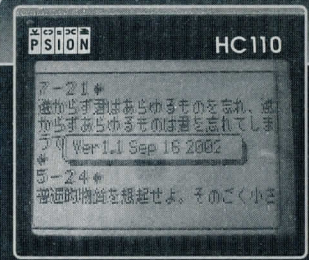
017



HC110用日本語エディタHCEditの編集画面

横17文字×縦7行が編集用エリアとして表示される。基本的な使用方法は、他のPsion用日本語エディタであるJEditと同じ

018



HCEditのクレジット画面

現在のバージョンは、Ver1.1 (2002/09/16)

019



サンプルリストの実行画面

最大サイズのウィンドウを開いて、その中にテキストを表示するだけという簡単なプログラムであるが、HC110では、ウィンドウを生成するだけで、多くのソースコードが必要になってしまう

サンプルリスト (HC110のCのソースコード)

```
#include <q_std.h>
#include <lib.h>
#define NWS_HANDLE 0
#define MAIN_WIN 1

GLREF_D UINT wMainWid;
GLDEF_D WSERV_SPEC wspec;
GLDEF_D P_POINT winsize = {160, 80};
LOCAL_D INT wMainGc;

LOCAL_C VOID SpecificInit(VOID)
{
    G_GC gc;
    wMainGc = gCreateGCO(wMainWid);
    gc.style=G_STY_MONO;
    gc.font=WS_FONT_BASE+4;
    gSetGC(wMainGc,G_GC_MASK_FONT,&gc);
    gSetGCO(wMainGc);
    gBorder(0);
}

GLDEF_C VOID CreateWindow(VOID)
{
    UINT field_set;
    W_WINDATA windata;

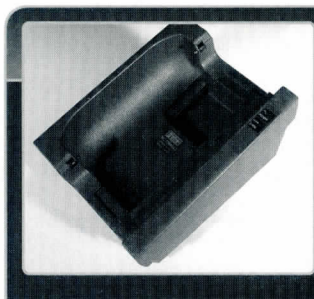
    wConnect(&wspec, NWS_HANDLE,
    W_CONNECT_PRIORITY);
    field_set = 0;

    if((wspec.conn.info.version_id&WS_VERSION_MASK)!
    =WS_VERSION_2){
        field_set = W_WIN_BACKGROUND |
        W_WIN_EXTENT;
        windata.background = W_WIN_BACK_BITMAP;
    }

    windata.extent.tl.x = 0;
    windata.extent.tl.y = 0;
    windata.extent.width = winsize.x;
    windata.extent.height = winsize.y;
    wMainWid = wCreateWindow(0, field_set,
    &windata, MAIN_WIN);
    wInitialiseWindowTree(wMainWid);
}

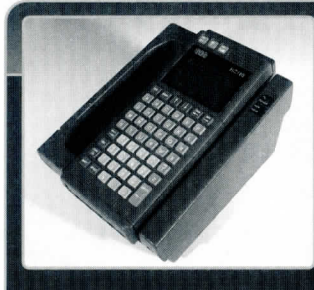
GLDEF_C VOID main(VOID)
{
    WS_EV event;

    CreateWindow();
    SpecificInit();
    gPrintText(40, 32, "The best of men", 15);
    gPrintText(40, 48, " is like water.", 15);
    do {
        wGetEventWait(&event);
    } while (event.type != WM_KEY);
}
```

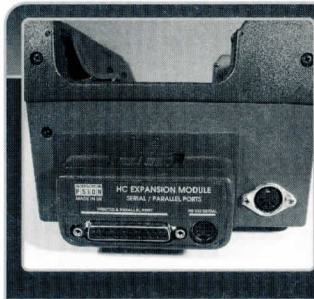
020

HCクレイドルの外観
HCシリーズ専用の巨大なクレイドル。Palmのクレイドルを見慣れた目には、余りにも巨大なため異様に映る



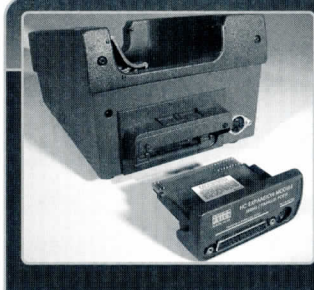
021

HCクレイドルに搭載したHC110
HC110をクレイドルに搭載すると、こうなる。取り付け、取り外しはまさにワンタッチ



022

HCクレイドルのインターフェイス部分
PCとHCクレイドルとを接続するインターフェイス部分。この部分にも、HC本体に搭載するものと同じモジュールが使われている



023

HCクレイドルのインターフェイスモジュール
このように、インターフェイスモジュールを必要に応じて取り替えることが可能。HC本体に使われているモジュールを流用することだってできてしまう！



024

HCクレイドルの外観ガンタイプのバーコードリーダー
専用のインターフェイスモジュールが入手できれば、使ってみよう！
専用装置。これで今日からあなたもショップのレジ係！

HCシリーズ用 拡張モジュール

現場でのデータ収集や処理を行う目的で作られたHCシリーズには、産業用の拡張モジュールが用意されていた。当時の資料を見ると、以下のインターフェースデバイスがラインアップされていたようである。

- HCクレイドル
- RS232/パラレルプリンタポート
- バーコードリーダー（ペンタイプもしくはCCDを用いたスキャナタイプの両方を用意）
- 磁気カードリーダー
- モデムモジュール
- RS232/磁気カード/スキャナのコンビネーションデバイス

上記のうち、HCクレイドルとCCDスキャナタイプのバーコードリーダーが手元にあるので、ご紹介しておこう。

HCクレイドルはHC本体で収集したデータをメインパソコンへ取り込んだり、HC内蔵のバッテリーを充電する際に使用する。HCクレイドルの脱着メカはたいへん良くできており、HC本体を少し斜めに傾けて押し込むことで、ワンタッチで確実にクレイドルへマウントできる。HC本体を装着する部分の下には、予備のバッテリーを充電するスペースも設けられており、細かいところまで良くできた製品だ。クレイドルへの電源供給は、専用のコネクタを介してACアダプタで行う。クレイドル背面には、プリンタ/パラレルポートとRS232Cシリアルポートが設けられているが、このI/OポートもHC本体と同様のモジュールで構成されているため、必要に応じて取り替えることが可能だ。このあたりの拡張性は、さすがである(020~023)。

CCDスキャナタイプのバーコードリーダーは、POSで使われる一般的なガンタイプのもので、接続ケーブルにはD-Sub 15Pinのコネクタが付いている。いかにも産業用途らしい周辺機器だ(024)。

おわりに

今回は原始EPOC OSを搭載した産業用端末、HC110についてご紹介したが、前回のSienaよりも少し濃い目の記事になったと思っている。さて、次回はいよいよPsion PDAの原点とも言うべき記念すべきモデル、Organizer-I、IIについてご紹介しよう。Psionが1984年に発売したOrganizer-Iは、日本ではほとんど紹介されたことが無く、その詳細については余り知られてはいなかった。そこで、次回以降Psionの知られざる端末の世界について、ご紹介しようと考えている。